〔一〕 次の―線のカタカナを漢字になおしなさい。

1 ナンボクに長い国。
2 平和をセンゲンする。
3 あの人はドキョウがある。
4 教会はシンセイな場所です。
5 作業をいったんテイシする。
6 ショチュウお見舞いを書く。
7 森の中でクマさんに出会った。
8 壊れた時計をシュウリに出す。
9 海外に自動車をユシュツする。
10 日大三中のニュウガクシキを心待ちにしている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

野生動物が絶滅するのはどんなときでしょう？

答えを発表する前に、氷河期に※1ユーラシア大陸や日本列島などに生息していた、オオツノシカの話をしたいと思います。

オオツノシカは、体高は二メートルほどですが、横幅が二メートル以上もあるとても大きな角を持っていました。こんなアンバランスな体型だと、頭が重くて動きづらかったと思います。ではなぜ、そのような致命的な悪条件を抱えていながら、オオツノシカは地球上に生息できたのでしょうか。(1)

オオツノシカが生きていた氷河期という時代は、気温がいまよりも五～十度ぐらい低く、広い草原には草が豊富にあって、角が大きいシカでも生きやすい環境だったのです。

A 氷河期が終わり、地球の温暖化が始まると、植生が変化しはじめ、森林と沼地の面積が急激に増加していきます。森林面積が広がるということは、たとえばオオツノシカが天敵の動物に追われたとき、森の中に逃げこもうとしても、大きな角がじゃまになって行く手を阻まれる、ということを意味します。沼地に逃げこんでも、足をとられると、頭の重さがじゃまをしてなかなか自力で抜けだせない、ということを意味します。草原が減り森林面積が増えると、草地を探して何キロも移動しなくてはならず、そのときも重くて大きな角がじゃまになるのです。

過去には、(2)大きな角が役立ったこともあるでしょう。オオツノシカは強そうだし、凛々しいし、牝鹿からは「ああ、なんてカッコいい牡鹿なんでしょう」と※2羨望の目を向けられたにちがいありません。その娘も孫娘も、角が大きくてカッコいいオスを追い求めつづけた結果、オオツノシカは角だけがますます大きくなっていったのだろうと、推測されているのです。

(3)そんなオオツノシカは、温暖化という環境の変化に対応できずに絶滅してしまいました。対照的に、環境の変化に対応して生き残ったのが、中型、小型の動物たちでした。

B 、冒頭の質問の答えはわかりましたか？

「あるひとつの特徴だけが肥大化したとき、野生動物は環境の変化に対応する力が弱まり、絶滅しやすくなる」

これが正解です。

人間でも、女性も男性も、外見を美しく見せることにばかり気をとられて、内面を磨くことをおこたると、人間としての多様性を失い、時代の変化に対応できなくなりますよ。なんていうことを、オオツノシカがたどった運命は、警告していると思いませんか。

内面を磨く努力をしている人にも、用心が必要です。「将来、自分はこの職業につくんだ」「自分の道はこれでキマリ！」と、人生の早い段階で自分の進路を一直線に突き進んでいる人は、「文学部志望の私には、理数系の科目はまったく必要ない。だから数学は勉強しなくていい」などというまちがった判断をしがちなのです。(4)

中学生や高校生からよく、こういう質問を受けます。

「将来動物園の飼育係になりたいのですが、どんな勉強をすればいいでしょうか」

ぼくはそんなとき、

「いろんなことを勉強しなければダメだよ」

と答えることにしています。

C 飼育係というのは生き物が好きでなければダメです。でも、ただ好きなだけではダメで、生物学の勉強がぜったいに必要になります。また、生き物の体の中では常に化学反応が起きているし、物理的な変化も発生するので、そう考えると理科全般をしっかりと勉強しておかなければなりませんね。

数学も必要です。自分が担当する動物に与えるエサの量を決めるときは、栄養価の計算をしなければなりませんし、動物舎を設計するときにも数学は必要になります。三角関数を知らなかったら、サル山の設計図は描けません。壁の高さは、助走の速度とジャンプ力から計算して割り出しているのですから。

旭山動物園の飼育係にとってだいじな仕事のひとつに、動物のすごさをお客さんにしっかりと伝える、ということがあります。飼育係の手書き※3ポップはすっかり有名になりましたが、わかりやすい文章を書く能力、作文や漢字の国語の力が必要です。ポップの内容をわかりやすくするた

め、たくさんのイラストが添えられていますが、絵を描く能力もあったほうがいいですね。

旭山動物園の名物企画に、飼育係が動物舎の前でその動物の魅力を紹介する「ワンポイントガイド」がありますが、動物のエサのつくり方を見せるんだと、テレビの料理番組のように、ホッキョクグマに与える馬肉の切り方や、キジに食べさせる白菜の切り方を紹介した飼育係がいました。これは家庭科ですね。音楽好きの男は、ギター片手に「さる山の歌」とか「トナカイの歌」をうたってましたが、音楽の能力もあったほうがいいなあ。

動物の動きをよく見てもらうために、飼育係はいろいろな小道具をつくります。たとえば「さる山」の担当者は、サルの学習能力を見てもらうために、木箱を転がすと中の固形飼料が出てくる「コロコロ」をつくったり、お参りのときに鳴らす仏具（鰐口）のような木箱で、揺すると［　X　］が出てくる仕掛けをつくったりしました。

サルは活動の半分をエサ探しに費やすのですが、これらはサルに退屈させないための道具であると同時に、行動展示のための小道具でもあります。そうです、動物園では工作の能力も必要なんです。

社会科もおろそかにできません。動物を理解するには、どんな地理的条件の中で育ってきたのかを知る必要があります。動物地理学という学問さえあるぐらいなのです。

また、人間は動物に対して、過去に何をしてきたのかを知る必要もあります。つまり歴史です。ぼくは動物園の仕事を始めてから、学生時代に歴史をちゃんと勉強しなかったことをとても後悔しました。いま世界中でいろいろな動物が絶滅しているわけですが、そのことを知るたび、「なんでこうなるまで放置したんだ。知らなかった」と悔しい思いを抱いたからです。

人間が歴史を学ぶことのたいせつさはそこにあります。進むべき未来は、過去を知らなければ見えてきません。過去を振り返って、なぜエゾオオカミやトキが日本で絶滅したのかを見つめ直してみてください。いま絶滅の危険にさらされているシマフクロウ、ニホンイヌワシ、ヒグマなどを救う方法を考えるヒントが、きっとそこにあるはずだからです。

英語のたいせつさはいうまでもありません。英語がニガ手だと一人前の獣医にも飼育係にもなれません。というのも、動物学の論文はほとんど英語で書かれているからです。読むだけではなく、実際に英語の論文を書くことも必要になります。

動物園で働きはじめたころは、一日四時間ぐらいしか寝ないで必死になって勉強しました。日本語で書いてある文献はもちろん、日本語に翻訳されていない本を読まないとわからないことも、山ほどありました。

もうおわかりでしょう。［　Y　］ということです。えー、そんなの無理だよー、という声が聞こえてきそうですが、でも、ぼくはこう思うのです。

いま勉強していることのひとつひとつは、小さな石ころかもしれません。でも、それがたくさん集まれば、高いピラミッドをつくることができます。だから、いまはちっちゃい石でもいいから、とにかくたくさん集めましょう。

いろいろな勉強をするということは、自分の中に多様性を持つということになります。いくら角が大きくてカッコよくても、オオツノシカのように多様性を失うと、環境の変化に対応できなくなるのとおなじようで、人間だって狭い知識しか持っていないと、人生のいろいろな場面に対応できなくなってしまいます。内面を磨くということは、つまり、いつ、どんな場面にも対応できる多様性を身につけるということなのです。

（小菅　正夫　『ペンギンの教え』）

※1　ユーラシア大陸＝アジア大陸とヨーロッパ大陸を合わせた呼び方。

※2　羨望＝あこがれ。

※3　ポップ＝絵などを使って、動物を紹介しているもの。

問一　本文中の［　A　］～［　C　］にあてはまる言葉を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア　まず　　イ　つまり　　ウ　さて

エ　なぜなら　　オ　あるいは　　カ　しかし

問二　――線(1)「致命的な悪条件」とありますが、それはどういうことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　氷河期という、今よりはるかに気温の低い時代に生きていたということ。

イ　体の大きさに対して、角が大きすぎるために頭が重くて動きづらいこと。

ウ　地球の温暖化が始まり、生活の環境がめまぐるしく変化していったこと。

エ　氷河期が終わり、沼地の増加により足をとられやすくなってしまったこと。

オ　大きな角を持っていないと、群れの仲間から認めてもらえないということ。

問三　――線(2)「大きな角が役立ったこともあるでしょう」とありますが、どのような点で「役立った」のですか。簡単に説明しなさい。

問四　――線(3)「そんなオオツノシカは、温暖化という環境の変化に対応できずに絶滅してしまいました」とありますが、どうして絶滅してしまったのですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　気温が急激に上がったことにより、体がついていけなかったから。
イ　森を追われて、人間と同じ場所で生きていくことができなかったから。
ウ　氷がとけたことで海面が上がり、住む場所がなくなってしまったから。
エ　見た目だけを良くしようとするあまり、身を守る力がつかなかったから。
オ　環境の変化に対応できない動物たちに、人間が手を差しのべなかったから。

問五　――線(4)「まちがった判断」とありますが、それはどういうことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　自分の道を一直線に進んでいって、他人の意見をまったく聞き入れようとしないこと。
イ　外見だけでなく内面を磨く努力もしているので、安心だと考えてしまうこと。
ウ　直接関係がないように見えることには、努力をしなくてもよいと考えること。
エ　すでに自分の進路が決まっているので、安心だと思いこんでいること。
オ　本当は自分に向いていないことを、向いていると思ってしまうこと。

問六　本文中の［　X　］にあてはまる言葉を本文中からぬき出して答えなさい。

問七　――線(a)「おろそかに」・(b)「いうまでもありません」とありますが、この言葉の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(a)「おろそかに」
ア　いいかげんに
イ　いますぐに
ウ　じっくりと
エ　はっきりと
オ　かんたんに

(b)「いうまでもありません」
ア　ぜひ取り上げるべきことです
イ　いっても仕方がないことです
ウ　想像することもできません
エ　わかりきったことです
オ　うまく表現できません

問八　――線(5)「人間が歴史を学ぶことのたいせつさ」とありますが、どうして「たいせつ」なのですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　歴史さえ学んでおけば、どんな困難にも立ち向かう力を身につけることができるから。
イ　飼育係は来園者の興味を引きつけるために、動物園の歴史を理解しておく必要があるから。
ウ　動物を守り育てるためには、その動物が進化してきたようすを知っておく必要があるから。
エ　これ以上動物を絶滅させないためには、一人でも多くの人が過去の例を知っておいたほうがいいから。
オ　過去の失敗を知ることで、これから先に同じような失敗をくり返さないためのヒントを得ることができるから。

問九　本文中の［　Y　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　寝る間もおしんで勉強しなきゃダメだ
イ　動物の立場でものを考えなきゃダメだ
ウ　海外留学を経験しなきゃダメだ
エ　勉強は全科目やらなきゃダメだ
オ　夢を持ち続けなきゃダメだ

問十　――線(6)「いま勉強していること……高いピラミッドをつくることができます」とありますが、「高いピラミッド」は何をたとえていますか。簡単に答えなさい。

問十一　わたしたちが生きていくうえでどのようなことが必要だと筆者は言っていますか。「多様性」という言葉を使って、七十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

〔三〕　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その日の国語の授業は、相変わらずおしゃべりの飛びかうさわがしい状態で始まりました。でも、太先生は、今までのように大声を出すのではなく、話を聞いていそうな子どもたちだけに向かって、今まで見せたことのない笑顔で語りかけました。

「さあ、ここに登場する主人公は、どんな思いで仕事をしていたんだろう？」

太先生は質問しました。すると、健太郎が答えました。

「外国のめぐまれない人々のために役に立ちたかったのだと思います。」

「そうだね。いいぞ、健太郎君。」

太先生は少しだけ声を大きくしました。続いて、奈々子が手を挙げました。

「先生、今の意見につけたしがあります。主人公は、子どものころに、自分の病気を治してもらったことがあったから、その恩返しがしたいという気持ちもあったと思います。」

「いい補足だね。二人の意見を合わせればかんぺきだ。」

と、太先生は、また声を大きくしました。見ると、健太郎や奈々子の周囲で、うなずく子どもたちもいます。そして、二人の発言を聞きのがした子どもたちの中には、

「聞こえませんでした。二人とも、もう一度言ってください。」

と発言する子まで出てきました。おしゃべりが一段と小さくなりました。

そのときです。大介は前にいる亮のイスをポンとけりました。大介の言いなりになっている亮には、(1)その意味がすぐにわかりました。

「カンペキ星人、奈々キング、グッドです！」

大声ではやしたてました。すると、教室内はすっかり元のさわがしい状態にもどってしまいました。そのときです。

「静かにしてくれないか。ぼくは授業を聞きたいんだ。」

と、大きな声をあげた子がいました。なんと卓也です。おとなしい卓也が大声をあげたので、みんなはおどろいて卓也に注目し、教室は静かになりました。卓也は、ふるえる手をぎゅっとにぎりながら言いました。

「ぼくは、病気のせいで黒板や教科書の文字が見えにくくなってきているんだ……みんなは教科書や黒板を見れば、少しぐらい授業を聞いていなくても理解できるかもしれない……でも、ぼくは、教科書も黒板の字も見えづらくなっているから……授業の内容を理解するただ一つの方法は授業を聞くことなんだ。それから、思いきり体を動かして遊んだりスポーツをしたりもできないから、ぼくの楽しみは……勉強を通していろいろなことを知ることなんだ……だから、お願いだからじゃまをしないでください。」

卓也は自分の気持ちを正直にうったえ、みんなは静かに聞いていました。ちんもくが続き、やがて奈々子が口を開きました。

「卓也君がそんなに苦しんでいたなんて、ぜんぜん知らなかった。でも、卓也君の勉強したいという気持ちを知った以上、今までのようにおしゃべりやあげ足とりの飛びかう授業じゃいけないと思う。みんな、授業に集中しよう。まずは先生の話を聞こうよ。そして、意見を出し合おう。卓也君のためにも、自分のためにも。」

「ぼくもそう思う。学校の授業がおもしろいのは、意見のちがう人どうしで討論することだと思う。塾にはない楽しさがあるはずなんだ。」

健太郎が発言しました。

自然とみんなの視線が、大介グループに向けられます。大介は卓也をにらんだままだまっていますが、その目は、納得していないように見えました。奈々子は深呼吸すると、

「大介君、授業に集中して、さわがないようにしてくれますか。」

と言いました。すると大介は、卓也をにらんでいた目をそのまま奈々子に向けて、

「おれは、さわいでなんかいないぞ。」

と、低い声で言いました。奈々子は、その声を聞いてもひるみません。(a)

「じゃあ隼人君は、約束できますか。」

と聞きました。自分の考えをまったく持っていない隼人は、大介の方をチラッと見ましたが、つい「できると思います。」と答えていました。こうなったら、奈々子の勢いは止まりません。大介グループの亮、智也、そして悠太にも同じ質問をしていきました。そして、三人とも、「できる。」

と答えたのです。

それからというもの、五年三組の授業は、少しずつ他のクラスのようにおしゃべりが少なく、活発に議論しあえるようになっていきました。

卓也がきっかけとなって、みんなの気持ちが授業を真剣に受けようという方向に動いたことに力を得て、学級委員の奈々子や健太郎は、新しい学級作りに乗りだしました。

二人は相談して、「クラスのだれもが学校生活でいやだと思うことをがまんしないクラス」という目標を立て、学級会に提案しました。具体的に取り組んだのは、教室のそうじでした。ある日の学級会で、奈々子はみんなに向かって問いかけました。

「教室は何もしないできれいになるわけがありません。そこで提案ですが、今週一週間をそうじ週間にしたいと思いますが、どうでしょうか？」

この意見にいい顔をしなかった子たちもいましたが、賛成する子の方が多く、そうじ週間が決まりました。そして、一週間後、五年三組の教室は、見ちがえるほどピカピカになりました。いったんきれいになった教室は、みんなが協力してよごさなくなりました。

そうじがきちんとできるようになると、自然と「いじめ」も少なくなったかのように見えました。ところが、うらでは残っていたのです。そこで、ある日の学級会では、いじめられた経験のある子どもたちが勇気をふりしぼって提案しました。

「かげで暴力をふるったり、言葉によるいじめはなくなっていません。五年三組をいじめのないクラスにしたいと思うのですが……。」

香川裕子の発言に、裕子と仲良しの佐々木愛が続いて発言しました。

「前から考えていたんですけど、『いじめ発見カード』を作ったらどうかと思います。いじめられた人だけでなくて、いじめを目撃した人も、カードに記入して学級会ポストに入れるんです。」

みんなは、大介の様子をうかがいました。

ここから先は学級委員の出番です。奈々子が提案しました。

「『いじめ発見カード』っていうのはいい意見だと思います。カードが入っていたときは、学級会でその事実を確かめて、本当にいじめがあった場合は、いじめた人に二度と同じことをくり返さないようにちかってもらうというのはどうでしょうか。」

これには、大介グループも反対できず、全員が「いじめ発見カード」に賛成しました。こうなってくると、力ずくで五年三組を支配してきた大介グループも(2)今までのようには動けなくなってしまいました。やがて、亮以外の三人はグループからはなれました。なぜなら、三人は、本当はいやなのにしかたなく大介についていたからです。

亮も大介がよばなければ近づいてこなくなり、大介は孤立してしまいました。そして、こんなことになったのも太先生のせいだと考え、太先生をやっつける機会をねらっていました。実行する場所は、できるだけクラスのみんなが見ていて、体を動かせる広い場所がいいと考えていたのです。

(3)大介にとってチャンスの日がおとずれました。昼休み後のそうじの時間です。大介は教室そうじの当番で、同じ班には亮がいました。

太先生が、ほうきを片手に教室に入っていくと、大介が、ほうきをバット代わりに構え、亮がぬれぞうきんを投げようとしていました。つくえは中途半端に後方に寄せられており、前の方にはまだつくえやイスが残っています。

大介と亮以外の子どもたちは、窓側のすみっこに追いやられ、どこかおびえているように見えました。

太先生が大介たちに注意をしようとした、そのときです。

バシャッ！

大介の打ったぞうきんが、先生の頭をかすめてかべにぶつかりました。

「君たちは、何をしてるんだ！」

太先生がどなると、大介が先生をにらみつけて答えました。

「見りゃあわかるだろ、野球だよ。そんなこともわかんねぇのかよ。」

「そんなことは、わかっている。そうじの時間に野球をしていいのかと聞いているんだ。」

「それなら、初めからそう聞けよ。何をしているって聞かれたから野球と答えたんだ。」

太先生は、この大介の答え方に腹が立ちました。太先生は、もう一度大介に問いかけました。「そうじの時間に、野球していていいって言うのか？」

「いけないと思います。」大介は、[A]答えました。

「いけないと思っていながら、なぜやってるんだ。」

冷静さを失いかけている太先生の声は少しふるえていました。大介は、先生のそんな心の変化に満足しました。

「おれは、先生がみんなきらいだ。特にあんたはな。良いクラスにすると言って、奈々子や健太郎たちを利用して、よくもおれのグループをぶっつぶしてくれたな。先生、おれと勝負しようぜ。」と身構えました。

身長百七十センチをこえる大介は、太先生より少し低いくらいです。その迫力に、亮も他の子どもたちも息を飲みました。

「ばかなこと言うな。」

「なんだよ、先生、やる前からビビッて降参かよ。」

「先生は、降参なんかしていない。君に注意をしているんだ。遊びをやめてそうじをしなさいと。」

「おれは、遊んでるんじゃない。先生、本当は負けるのがこわいんだろう。」

「先生が負けるわけないだろう。先生は大人なんだ。」

「ごちゃごちゃうるさいな。先生、いくぜ。」

大介は、ほうきをすてるとこうげきの構えを作りました。太先生も、しかたなくぼうぎょの姿勢を作ります。(4)大介は心の中で笑いました。じりじりと太先生にせまっていくと、すばやくイスをかかえ上げ、思いき

り投げつけました。子どもたちは、思わず目を両手でふさいでいました。
しばらくして、子どもたちが指の間からのぞいてみると、そこにはイスをみごとにつかんでいる太先生のすがたがありました。
「先生、すごい！」
教室に歓声(かんせい)があがりました。その声で(b)われに返った太先生は、自分の二つの手がしっかりとイスの足をにぎっていることに気がつきましたが、どうやってイスをつかんだのか思い出せません。大介は、口をぽかんと開けて立っています。もはやするどい目つきではなく、戦おうという意志は感じられませんでした。太先生は、ゆっくりと大介のところに歩み寄ると、(5)大介をだきしめました。
「大介君、気がすんだかな。」小声でたずねると、大介も小さな声で、「はい、負けました。」と答えました。
「これは、勝った負けたの問題ではないんだよ。みんなが待ってる。さあ片付けて、五時間目の授業を始めよう。」太先生はそう言うと、もう一度大介を強くだきしめたのです。

その日、大介は家に帰ると、台所のイスにすわったまま長い時間考えこんでいました。（なぜあいつは、おれをなぐらなかったんだろう。先生だから、子どもはなぐれないってことか？　どなったりしなかったし、お説教もなかった。ただやさしくおれを、だきしめてくれた。なぜだ？　他のやつらに、自分のやさしさをアピールするためか？　人気取りでやったのか？）大介の頭の中には、次々と思いがうかんで結論が出せませんでした。
次の日、ねぶそくで重たい頭をかかえて大介が学校に着くと、太先生がボールをかかえて教室にいました。
「大介君、おはよう。」
太先生は、明るく大介にあいさつしました。
「お、お、おはようございます。」
大介は、ドキドキしながら答えました。大介が先生に面と向かってあいさつをしたのは、これが初めてでした。
太先生は、明るく言いました。
「外でドッジボールするぞ。卓也君を連れてきてくれないかな。」
「え？　え？　おれが？　どうして、おれなんだよ。」
「君は卓也君のクラスメートだからさ。」
大介の頭には、卓也をいじめていた苦いきおくがよみがえっていました。
大介は、しばらく考えると、大きく息をすいこみ、大またで卓也のそばに近づきました。そして、[B]卓也に話しかけました。
「卓也、行くか？」
「行く？　どこに？」
「運動場。」
「どうして？」
「いっしょにドッジボールやるんだよ。やりたくねえのか？」

「やりたいけど……。」
「やりたいけど、何だよ。おれといっしょじゃいやなのかよ。」
大介は、キョロキョロと自信なさそうに目を動かしながら言いました。
「いやなのは、大介君じゃないの？　いつも『卓也菌(きん)がつくから近づくな。』とか『きもい。』とか言ってるじゃないか。」
「うるせえな。やるのかやらねえのか、はっきりしろよ。置いてくぞ。」
卓也は、しばらく何ごとかを考えている様子でしたが、やがて決心したように言いました。
「大介君、連れていってください。でも、ぼくの手は、よだれや目やにでよごれているから、手をつながなくてもいいよ。あぶない所を教えてくれればいいから。だいたいのことは自分でできるからね。」
今度は大介が考えました。卓也をきたないときらっていじめてきたのに、卓也は大介の気持ちを考えて、手をつながなくてもいいと言っているのです。ぼんやりしている大介に、卓也が話しかけました。
「大介君、どうしたの？　いやだったらいいんだよ。」
しかし、大介はだまって卓也の手をにぎると、歩きはじめました。
「大介君、無理しないで。手をはなしてください。」
「うるせえな。この方が安全だろ？　ごちゃごちゃ言ってないで来い。卓也、おまえの手は、きたなくなんかないぞ。おれは平気だ。」
大介と卓也は手をつないで階段を下り、昇降口(しょうこうぐち)でくつをはきかえると、(6)校庭へと向かいました。その様子を見た隼人たちは、あんぐりと口を開けていました。

その日の午後、大介はまたもやなやみはじめました。
なぜ太先生は大介に明るくあいさつをしてくれたのか、なぜあいさつで気持ち良くなったのか、なぜ卓也は大介といっしょに行くと言ったのか――。
大介がいくら考えても、答えは見つかりませんでした。
一週間が経(た)ちました。太先生と大介は、教育相談室の中で向き合っていました。いくら考えても解決できないなやみにがまんしきれなくなった大介が、太先生に相談したのです。
太先生は、大介の目を見つめながら話しかけました。
「人間は、出会いの始まりにあいさつをするんだよ。あいさつが、人と人とをなごやかにさせてくれるんだ。知らない人どうしでも、心のこもったあいさつ一つで親しい友だちになれるんだよ。君は、その心地(ここち)よさを感じることができたんだ。(7)素晴(すば)らしいことだと先生は思うよ。」
大介は、太先生の言葉に、頭の中のきりが晴れていくように思いはじめました。大介も太先生の目をじっと見つめています。
「人の心を思いやることができる人になると、相手の人もやさしい気持ちになるんだよ。卓也君が君にやさしくしたのは、君が卓也君のことを思っていると感じたからだね。だから卓也君は、大介君にやさしくなれたんじゃないのかなあ。そして君は、きたないという気持ちをどこかへ

追いやってしまうくらいのやさしさを、卓也君に示したんだ。君たちは本当の友だちになったんじゃないかと思うよ。」

「おれと卓也が、本当の友だちに？」

「そう、本当の友だちだ。」

「本当の、友だち……。」

大介は、その言葉をかみしめました。(8)「友だち」とくり返すたびに、心の中が温かくなります。

「卓也君は、君も知っているようにむずかしい病気にかかっている。ふつうの人が経験しないようなつらい経験をたくさんしてきたんだ。けれど文句一つ言わず必死にがんばっている。卓也君は、常に自分の良さというものを持ち続けているよ、心の強さを持っている。君たちの暴力にくっせず、勉強したいという気持ちを通しただろ？」

大介は、「ぼくは授業を聞きたいんだ。」とうったえた卓也のことを思い出していました。あのとき大介はショックを受けていたのです。

「病気は理不尽※とも言えるよね。その理不尽さは、卓也君がいくら努力したって変えられない。今の医学ではね。それなのに卓也君は、決してあきらめていない。すごいと思わないかい？」

「そのすごいやつを、おれはいじめていたんだ……悪いことしたな。」

「そう思えるんだったら、卓也君のがんばりを大介君の力で手助けしてくれないかな。もっともっと本当の友だちになるために。」

「どうすればいいの？」

「それは大介君が考えるんだ。君に何ができるか考えて、実行していけばいいんだよ。」

「おれにできるのかな。」

「できるさ。君はこんなに考えたじゃないか。きっとできる。」

(9)大介の心のもやもやが晴れ、その顔には自然と笑顔がうかびました。

「太先生、ありがとう！」

「おや、初めて太先生とよんでくれたね。」

二人は、顔を見合わせ静かに笑いながら手をにぎりしめました。

赤い夕日が、相談室をやさしくてらしていました。

（佐藤　四郎　『太陽にファイト』）

※　理不尽＝理屈では説明できないこと。

問一　――線(1)「その意味がすぐにわかりました」とありますが、どのような「意味」がわかったのですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　奈々子のことをしっかりほめろという意味。

イ　先生がいい発言を期待しているぞという意味。

ウ　教室をうるさくするきっかけをつくれという意味。

エ　みんなが活発に発言できるようにしろという意味。

オ　卓也がお願いしやすい雰囲気をつくれという意味。

問二　――線(a)「ひるみません」・(b)「われに返った」とありますが、この言葉の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(a)「ひるみません」

ア　もうがまんすることができません

イ　相手のいきおいに負けていません

ウ　以前のようには元気を出せません

エ　言っていることに納得できません

オ　授業に集中することができません

(b)「われに返った」

ア　いきおいを得た

イ　はずかしくなった

ウ　がまんできなくなった

エ　最初の決意を思い出した

オ　落ち着きを取りもどした

問三　――線(2)「今までのようには動けなくなってしまいました」とありますが、これはどういうことですか。次の［　　］にあてはまる言葉を本文中からぬき出して、Xは十五文字、Yは九文字、Zは七文字で答えなさい。

今までは自分たちが［　X　］のに、クラスが［　Y　］ようになったので、［　Z　］けれどみんなの意見にしたがわなければならなくなったということ。

問四　――線(3)「大介にとってチャンスの日がおとずれました」とありますが、それはどのような「チャンス」ですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　自分をおさえつけてきた奈々子に仕返しをするチャンス。
イ　スポーツの得意な太先生に野球を教えてもらうチャンス。
ウ　きらわれていた自分が協力する姿勢を見せるチャンス。
エ　仲が悪くなっていた太先生と仲直りするチャンス。
オ　自分を孤立させた太先生をやっつけるチャンス。

問五　本文中の［　A　］・［　B　］にあてはまる言葉として最も適当なものを選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア　親しそうに
イ　てきぱきと
ウ　おずおずと
エ　さびしそうに
オ　くやしそうに
カ　あっけらかんと

問六　――線(4)「大介は心の中で笑いました」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　自分が望んでいたとおりの反応を、太先生が見せたから。
イ　クラス中の注目を、久しぶりにあびることができたから。
ウ　先生が遊び相手をしてくれたので、掃除をさぼれるから。
エ　今までクラスに元気がなかったのに、活気が戻ったから。
オ　太先生が、自分のことを受け止めてくれたと感じたから。

問七　――線(5)「大介をだきしめました」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　大介がもうあばれないように落ち着かせるため。
イ　大介の泣き顔をまわりに見せないようにするため。
ウ　大介が自分に立ち向かってきた勇気をたたえるため。
エ　大介に自分の存在の大きさを見せつけようとするため。
オ　大介の存在を大切なものとして受け入れようとするため。

問八　――線(6)「その様子を見た隼人たちは、あんぐりと口を開けていました」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　わがままな卓也が大介のいうことを聞いていたことを、不思議に思ったから。
イ　大介が体の弱い卓也をドッジボールに連れ出したので、心配だと思ったから。
ウ　大介と卓也が仲直りしているのに、自分たちはその機会を失ってしまい、残念に思ったから。
エ　いつもは卓也をいじめていたはずの大介が、卓也のために尽くしているので意外だったから。
オ　いじめられていた卓也といじめていた大介の立場が、完全に入れかわっていたのに驚いたから。

問九　――線(7)「頭の中のきりが晴れていくように思いはじめました」とありますが、どうしてそのように思ったのですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　今までなにも考えずにいじめていた卓也が、本当は病気で大変な苦労をしているということがわかってきたから。

イ　自分ではうまく説明できない気持ちの変化が、太先生と話をすることでわかるようになってきたから。

ウ　自分は今までなにごとも力で解決してきたが、それは無意味なことだと太先生に教えられたから。

エ　自分はいつも怒(おこ)られてばかりいたのに、このとき初めて太先生にほめてもらうことができたから。

オ　太先生との勝負に負けてしまったことで、自分の存在の小ささに改めて気づいたから。

問十　――線(8)「『友だち』とくり返すたびに、心の中が温かくなります」とありますが、どうして「心の中が温かく」なるのですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　今までの友だちに対するふるまい方が、いかにはずかしいものであったかに気づいたから。

イ　クラスの中で孤立してしまっていたが、また自分の思い通りに動く友だちができそうだから。

ウ　新しい友だちとうまくやれば、今まで迷惑をかけてきたことへのつぐないができると思ったから。

エ　自分の接し方を変えることで、おたがいに気づかいあえるような関係が生まれる良さがわかったから。

オ　新しい友だちをつくったことによって、今まで気づかなかった自分の一面を発見することができたから。

問十一　――線(9)「大介の心のもやもやが晴れ、その顔には自然と笑顔がうかびました」とありますが、この時の大介の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

以下余白